

文書館の仕事⑥

古文書類を汚損・劣化から守る

文書館が受け入れる古文書類には、傷んでいるものがしばしば見られます。

虫に食われて穴だらけになった古文書、カビの生えた古い帳簿、ネズミに齧られ尿や糞で汚れた冊子などに出くわすことは、古文書を整理する者にとって珍しいことではありません。

傷んだ原因の多くは、生物によるものです。古文書を食べる虫としてよく知られているのは紙魚です。これは紙の表面を舐めるように齧ることが知られています。銀色のすばしっこい虫で、普通の家庭内でも多く見かけられます。一方、古文書の虫食いとしてポビユラー(?)なのは和紙を穴だらけにするもので、これは紙魚ではなく、大抵はシバンムシという小さな甲虫の幼虫による食害です。



虫に食われた古文書。このようになると全部を開いて見ることは難しい。



カビの生えた古文書。火災に遭い消火で水に濡れたものらしい。

カビは古文書だけでなく、条件があればどこにでも発生するものです。古文書全体がカビに覆われているのは、雨漏りなどで濡れたためと考えられます。

さて、文書館が古文書類を受け入れる保存するのは、直接何かの役に立てるためというよりも、むしろ古文書を人類共通の記録遺産として後世に伝えていくためです。このため、傷んだ古文書をどうするか、古文書を傷めないためにはどうすべきかを考えることは、文書館にとって大きな課題となっています。この課題に対応する文書館の業務が、補修と虫菌害の防止です(文書館に限らず美術館や博物館でも同様です)。

補修は、傷んだ古文書に手を加えることでこれを甦らせ、永続的な利用と保存に耐えられるようにすることです。ただしこれには原則があります。ひとつは、むやみに補修をしないことです。これは、古文書類はできるだけ元の姿かたちで保存していくのが望ましいという考えに

基づいています。少々虫食いの穴があっても、保存と利用に支障がなければ安易に補修はしないというのが基本的な立場です。もうひとつは、至極当然のことですが、素人が思いつきで手を出したりしないことです。古文書類の補修は専門的な修行と経験が必要な高度な技です。我々文書館の職員といえども補修については素人であることには変わりはありません。素人が手をかける場合でも、専門家による十分な指導のもとに範囲を限って行うことが鉄則なのです。

虫菌害の防止のために普通に行われてきたのは、ガスによる殺虫と殺菌です。文書館の書庫は温度湿度が適度に保たれているため、虫の卵やカビ類が古文書についていた場合、書庫に入れたあとで被害が拡大することさえありません。このため、文書館では専用の燻蒸庫を備え付け、外部から受け入れた古文書を書庫に収める前に燻蒸を行ってきました。

このとき使われる薬剤は臭化メチルですが、これはオゾン層破壊物質に指定され、平成十七年には全廃されることになっています。もちろん当館も例外ではありません(ただし、この薬剤が使用されていた目的の大部分は土壌燻蒸と検疫用で、文化財に用いられたのはごくわずかです)。

現在、臭化メチルに代わるいくつかの薬剤が文化財燻蒸用として各地で使われ始めていますが、今後、虫菌害を防止



県立文書館の燻蒸施設。臭化メチル用に設計されているため、このままでは他の薬剤に対応できない。

していくためには、書庫に入れる前に一度燻蒸して終わりという大雑把なやり方ではなく、きめの細かい(ある意味手間のかかる)方法で古文書をケアしていくことが必要になってきます。

古文書類に被害を与える生物といった場合、虫やカビとは別格扱いで問題とすべきは、実は「人間」であるかもしれません。意識的か無意識的にかかわらず、われわれ人間は古文書汚損という所業を重ねてきました。古文書そのものに直に万年筆で文字を書き込む、ゴム印を押す、糊付き付箋を貼る、古文書をホッチキスで綴じる、セロハンテープで貼り付ける、厚い冊子を無理やりガラス面に押し付けてコピーをとる、唾をつけた指でめくる、等々、劣化と汚損の原因はさまざまです。虫やカビと違って、これに対しては教育と啓発を繰り返すことこそが唯一の方法です。これもまた文書館が果たすべき古文書保存業務の重要な一環なのです。

(長沢 洋)